

口永良部島の火山活動解説資料

福岡管区气象台
火山監視・情報センター
鹿児島地方气象台

＜噴火警戒レベル 5（避難）が継続＞

口永良部島では、火山活動が高まった状態が継続しています。

昨日（6日）に、気象庁機動調査班（JMA-MOT）が、九州地方整備局の協力を得て上空からの観測を実施しました。

火口内の中心付近は噴煙のため不明でしたが、5月29日の噴火前に実施した上空からの観測（3月25日）と比較して、火口内北側と、火口南西側の一部が消失していました。西側割れ目や南側割れ目の形状に大きな変化はありませんでした。このことから、5月29日の噴火は新岳火口内で発生したと考えられます。赤外熱映像装置¹⁾による観測では、火砕流²⁾の堆積物に対応すると考えられる熱異常域を確認しました。

また、昨日、気象庁と東京大学大学院理学系研究科及び京都大学が実施した観測では、二酸化硫黄の放出量は一日あたり1,200トンと引き続き多い状態でした。

今後、5月29日と同程度の噴火が発生する可能性があります。

【防災上の警戒事項等】

大きな噴石の飛散及び火砕流の流下が切迫している居住地域では、厳重な警戒（避難等の対応）をしてください。

屋久島町の避難等の指示に従ってください。

風下側では火山灰だけでなく小さな噴石が風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

降雨時には土石流の可能性があるので注意してください。

新岳火口から半径2海里以内の周辺海域では、噴火による影響が及ぶ恐れがありますので、噴火に警戒してください。

○ 活動概況

・表面現象の状況（図1～6、図7-①⑤）

口永良部島の新岳では、昨日（6日）は白色の噴煙が最高で火口縁上400mまで上がっているのを確認しました。本日は13時までには火口縁上300mまで上がっています。

昨日（6日）、気象庁機動調査班（JMA-MOT）が、九州地方整備局の協力を得て上空からの観測を実施しました。

この火山活動解説資料は福岡管区气象台ホームページ (<http://www.jma-net.go.jp/fukuoka/>) や気象庁ホームページ (<http://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/volcano.html>) でも閲覧することができます。

この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学、東京大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所および屋久島町のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』『基盤地図情報』『基盤地図情報（数値標高モデル）』を使用しています（承認番号：平 26 情使、第 578 号）。

火口内の中心付近は噴煙のため不明でしたが、5月29日の噴火前に実施した上空からの観測（3月25日）と比較して、火口内北側と、火口南西側の一部が消失していました。また、新岳火口底が深くなっていました。西側割れ目や南側割れ目の形状に大きな変化はありませんでした。このことから、5月29日の噴火は新岳火口内で発生したと考えられます。赤外熱映像装置による観測では、火砕流の堆積物に対応すると考えられる熱異常域を確認しました。堆積物に対応する熱異常域は、新岳西側斜面に広く分布しています。また、新岳西側割れ目付近でも熱異常域を確認しました。

・火山ガスの状況（図7-④⑧）

昨日（6日）に気象庁と東京大学大学院理学系研究科及び京都大学が実施した観測では、二酸化硫黄の放出量は一日あたり1,200トンと引き続き多い状態でした。

・地震や微動の状況（図7-②③⑥⑦）

5月29日09時59分の爆発的噴火後に火山性地震が増加していましたが、29日13時以降は少ない状態となっており、5月30日以降の日回数は1～8回と少ない状態で経過しています。

火山性微動は、5月29日の爆発的噴火に伴い発生して以降、観測されていません。

- 1) 赤外熱映像装置は物体が放射する赤外線を感知して温度分布を測定する測器です。熱源から離れた場所から測定することができる利点がありますが、測定距離や大気等の影響で実際の熱源の温度よりも低く測定される場合があります。
- 2) 火砕流とは、火山灰や岩塊、空気や水蒸気が一体となって急速に山体を流下する現象です。火砕流の速度は時速数十kmから数百km、温度は数百℃にも達することがあります。



図1 口永良部島 新岳火口の状況の比較（上：2015年6月6日、下：2015年3月25日）
3月25日の観測と比較して、赤丸の部分が消失して他、火口底が深くなっていました。



図2 口永良部島 新岳火口の状況の比較（上：2015年6月6日、下：2015年3月25日）

3月25日の観測と比較して、西側割れ目（図中A）や南側割れ目（図中B）の形状に大きな変化は認められませんでした。

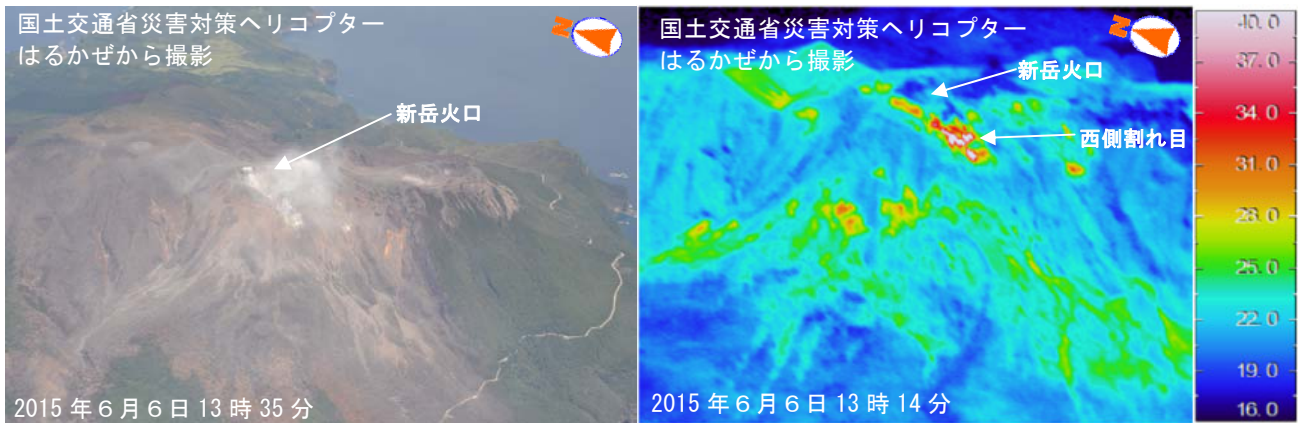


図 3 口永良部島 新岳西側からの状況（6月6日）

新岳火口周辺及び新岳西側斜面では、火砕流の堆積物と考えられる熱異常域を確認した他、新岳火口西側割れ目付近の熱異常域も確認しました。

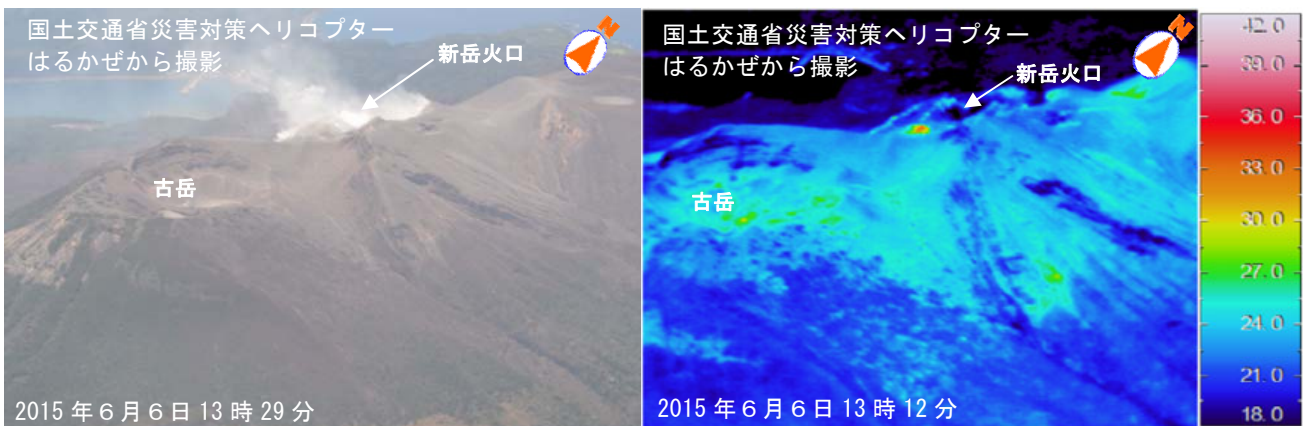


図 4 口永良部島 新岳南東側からの状況（6月6日）

新岳火口の東側及び古岳周辺では、火砕流の堆積物と考えられる熱異常域を確認しましたが、新岳西側ほどの広がりはありませんでした。

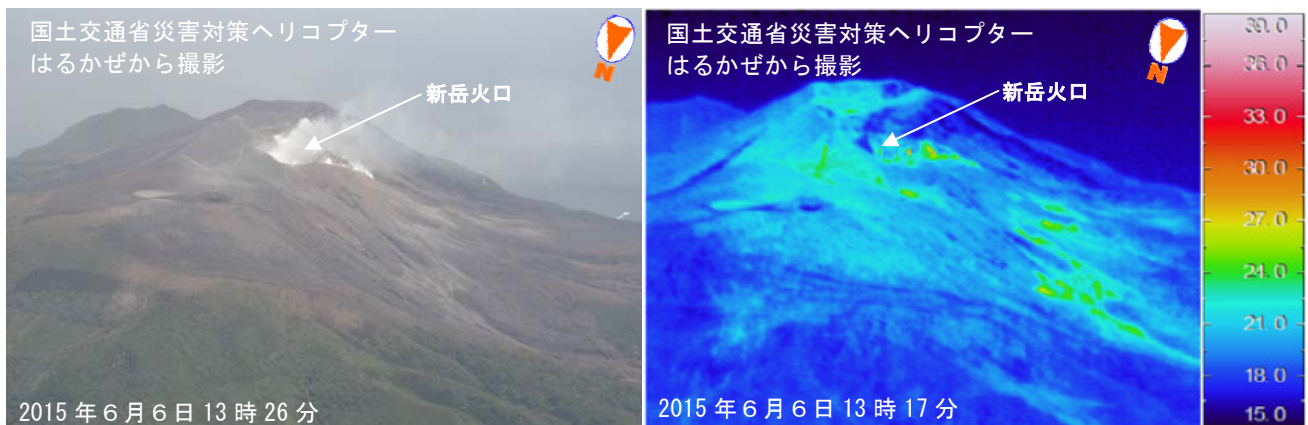


図 5 口永良部島 新岳北側からの状況（6月6日）

新岳火口周辺及び新岳西側斜面では、火砕流の堆積物と考えられる熱異常域を確認した他、新岳火口西側割れ目付近の熱異常域も確認しました。

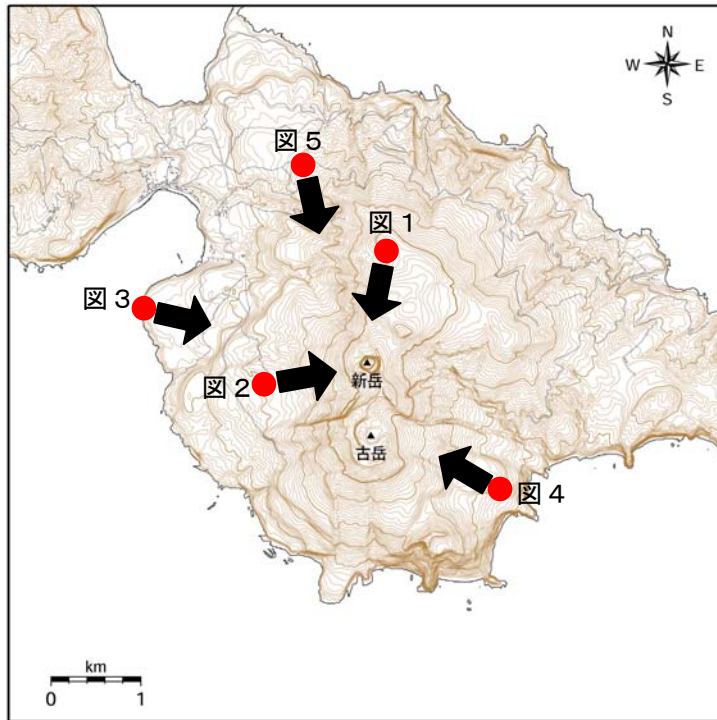


図6 口永良部島 写真撮影位置図（矢印は撮影方向を示す）

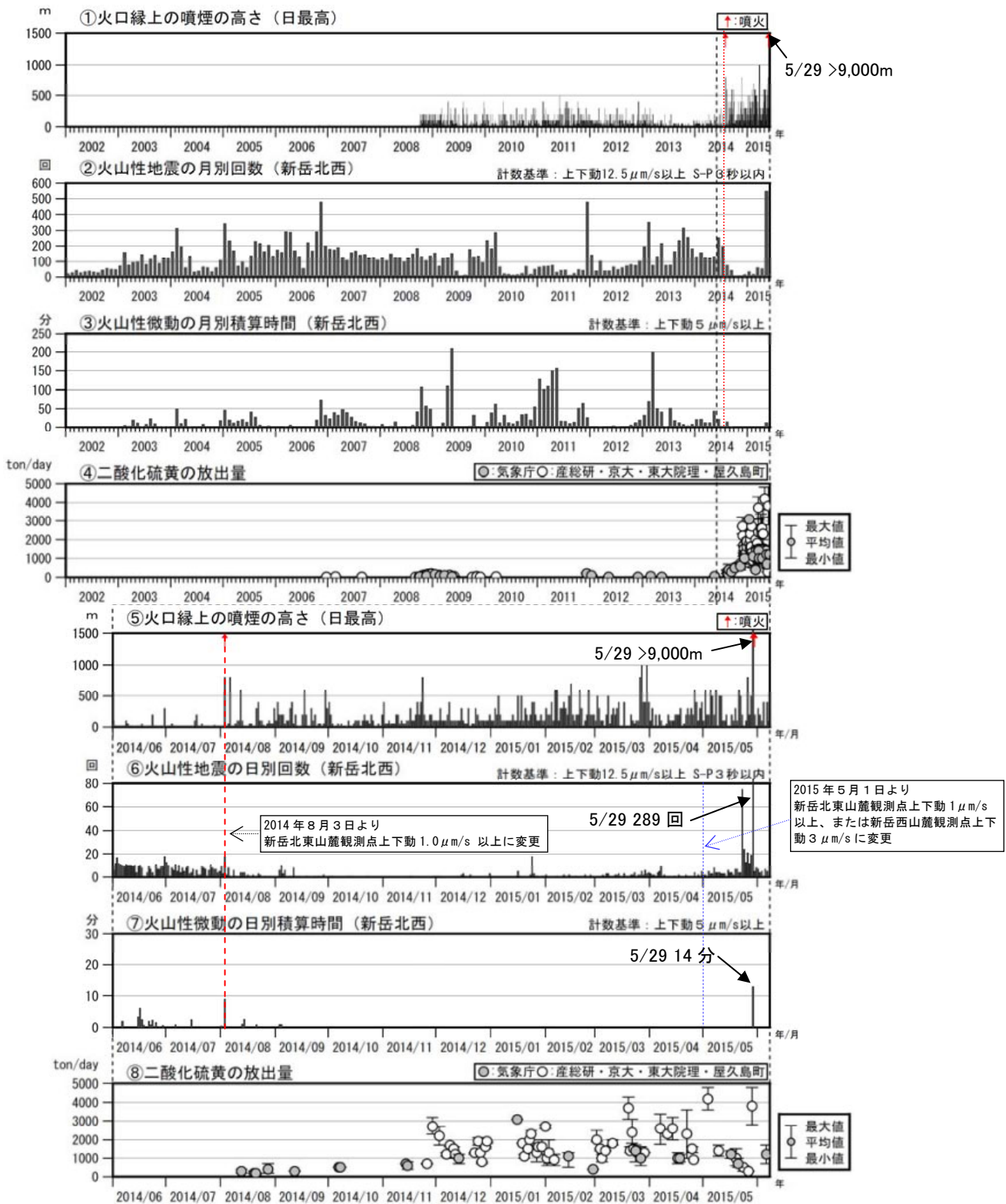


図7 口永良部島 火山活動経過図（2002年1月～2015年6月7日12時）

- ・5月29日09時59分の爆発的噴火後に火山性地震が増加していましたが、29日13時以降は少ない状態となっており、5月30日以降の日回数は1～8回と少ない状態で経過しています。
- ・火山性微動は、5月29日の爆発的噴火に伴い発生して以降、観測されていません。

※2014年8月3日の噴火により、火口周辺の観測点が障害となったため、噴火以降（図中赤破線後）は新岳火口から約2.3kmにある新岳北東山麓観測点で計数しており、検知力が低下しています。
 ※2015年5月23日に発生した島内のごく浅いところを震源とする地震（震度3、M2.3：暫定値）が発生したことから、監視を強化するため、5月1日にさかのぼって計数基準を見直しています。

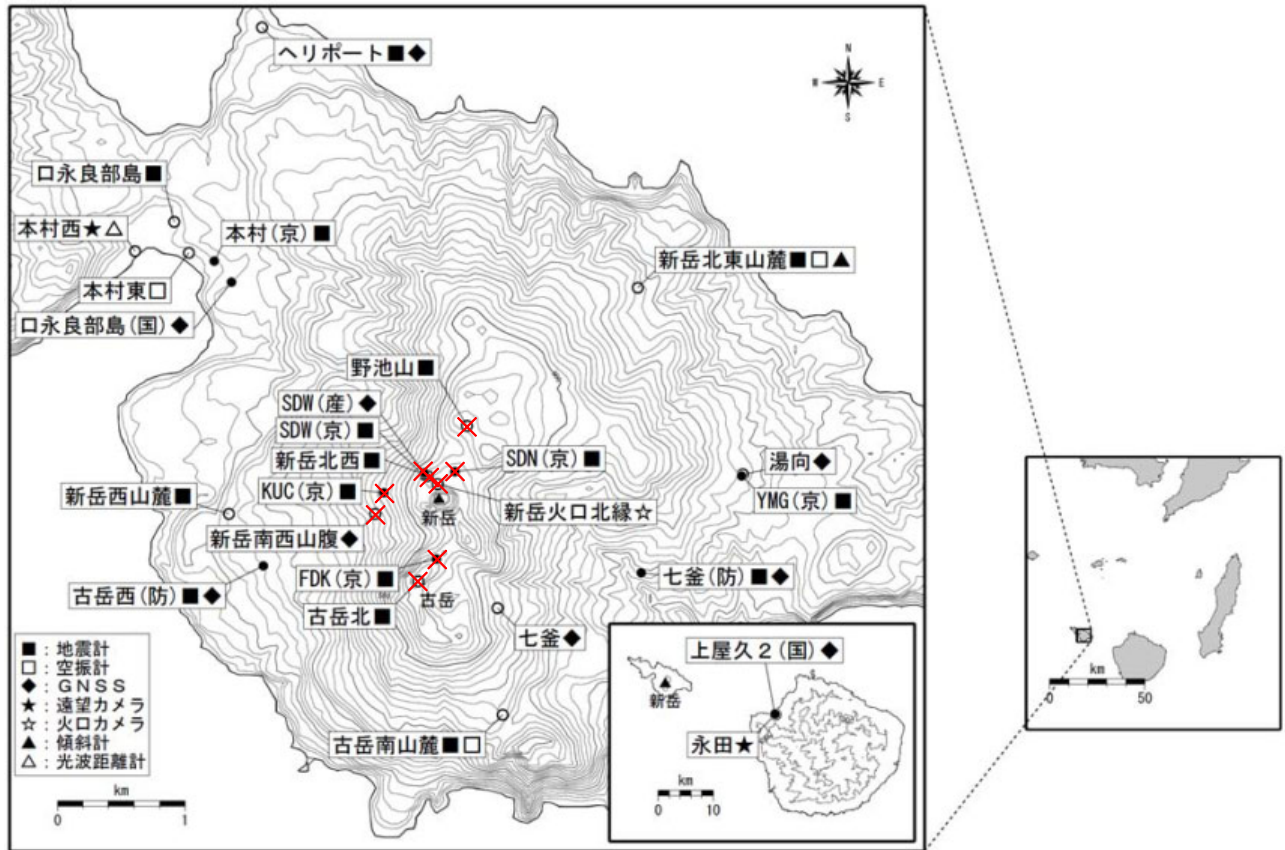


図8 口永良部島 観測点配置図

小さな白丸 (○) は気象庁、小さな黒丸 (●) は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
 (国)：国土地理院、(京)：京都大学、(防) 防災科学技術研究所、(産)：産業技術総合研究所
 山頂周辺の観測点 (図中赤×印) は、2014年8月3日の噴火により障害となっています。